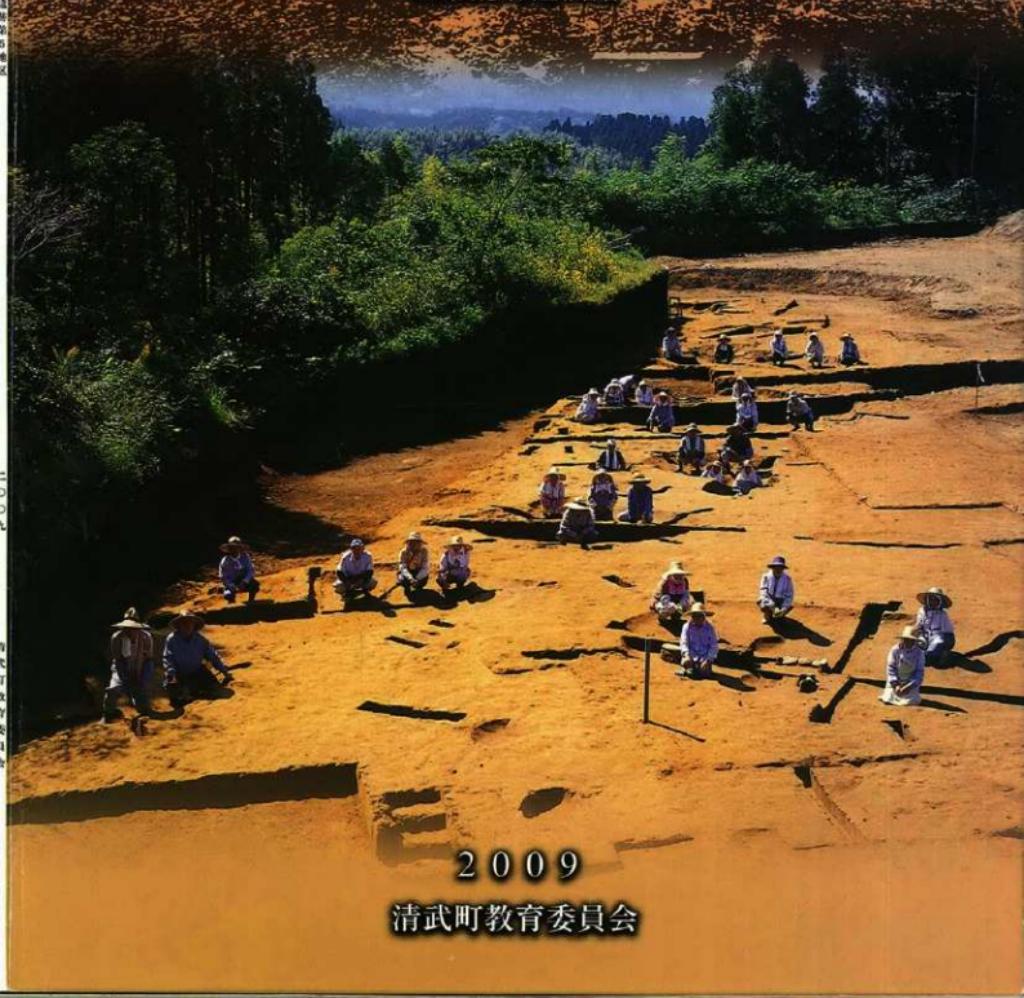


KIYOTAKE KAMIINOHARU

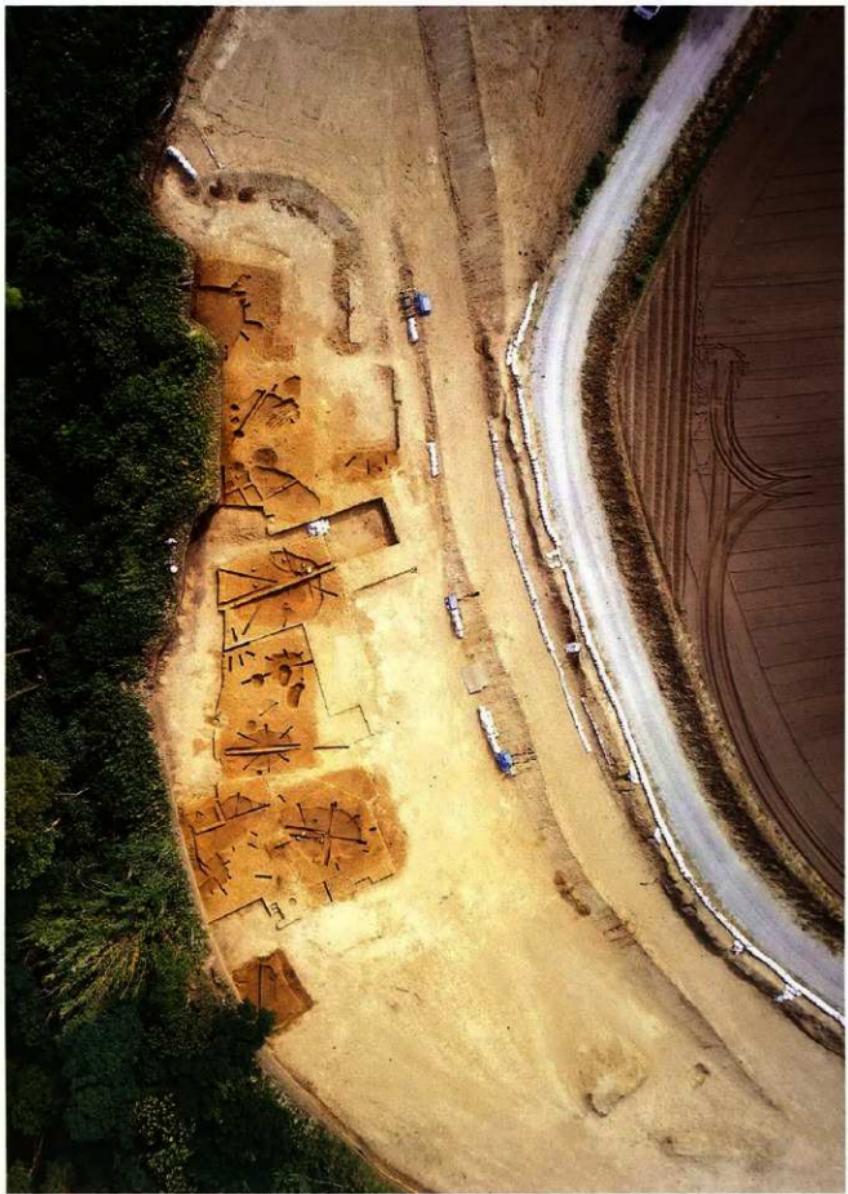
清武上猪ノ原遺跡 第5地区

県営農免農道整備事業船引2期地区工事にかかる
埋蔵文化財調査報告書



2009

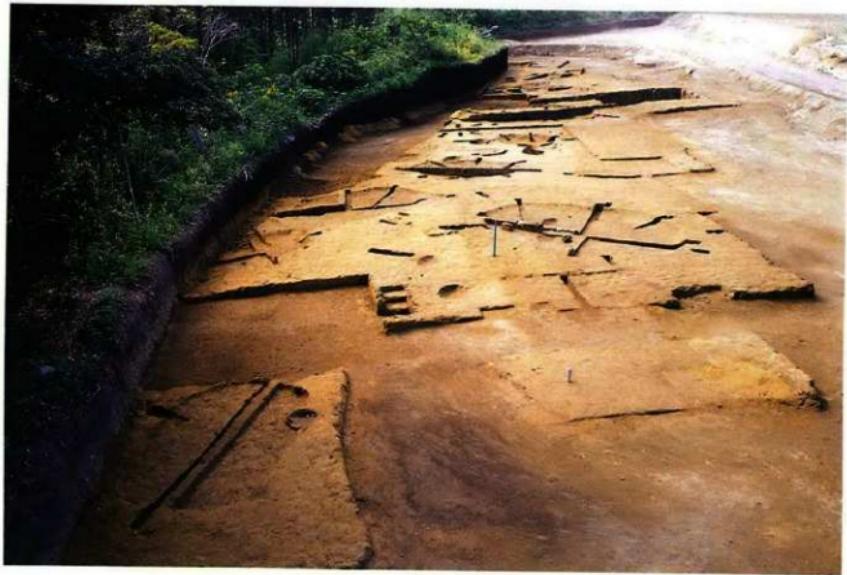
清武町教育委員会



清武上猪ノ原遺跡第5地区 縄文時代草創期住居跡群①（真上から）



清武上猪ノ原遺跡第5地区 縄文時代草創期住居跡群②（南から）



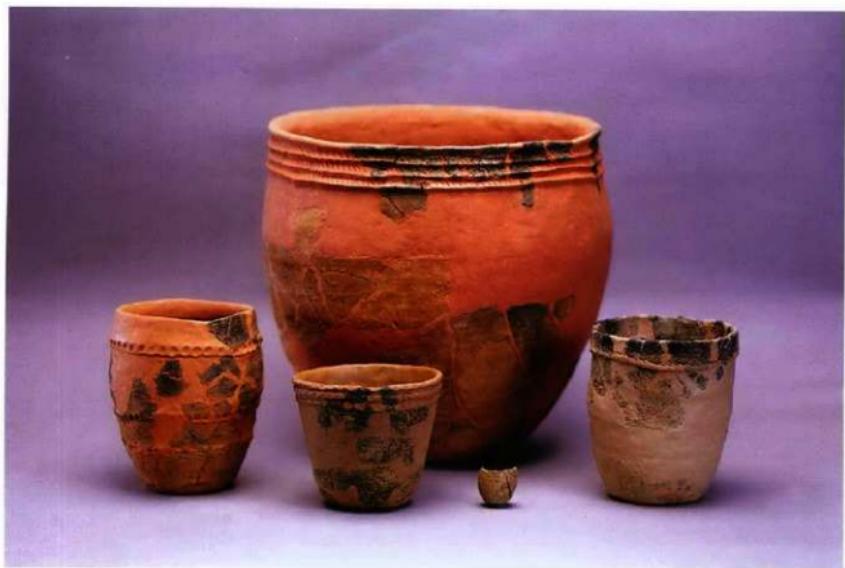
清武上猪ノ原遺跡第5地区 縄文時代草創期住居跡群③（北から）



清武上猪ノ原遺跡第5地区 縄文時代草創期住居跡（1号住居跡～4号住居跡）



清武上猪ノ原遺跡第5地区 矢柄研磨器出土状況



清武上猪ノ原遺跡第5地区 縄文時代草創期土器



清武上猪ノ原遺跡第5地区 縄文時代草創期石器

序

本書は、平成 17 年度から平成 20 年度まで本町の船引地区で実施された県営農免農道整備事業に伴って発掘調査が行われた清武上猪ノ原遺跡第 5 地区の発掘調査概要報告書です。

本遺跡は数年にわたって調査がおこなわれ、平成 18 年度には九州で初めての出土事例となる矢柄研磨器が出土し、さらに平成 19 年度には国内最大級となる縄文時代草創期の竪穴住居跡群が検出されて全国的に注目を集めました。

本遺跡の調査成果は「定住生活」を始めた頃の人々の生活を復元していく上で非常に重要であり、全国的にも類例の少ない歴史的遺産であることを考慮し、関係各局との協議の上、部分的ではありますが、現状保存することができましたことは喜びに堪えません。

今後、保存区域の活用を検討するとともに、この度の調査成果を学術研究、学校教育、生涯学習の発展に寄与していくような活きた資料とすることが本町の課題であります。

最後になりましたが、発掘調査の実施及び本遺跡の保存に関しまして、中部農林振興局及び地元関係者の方々に深いご理解とご協力を賜りました。心から感謝し、御礼申し上げます。

平成 21 年 3 月

清武町教育委員会

教育長 神川孝志

例　　言

- 本書は県営農免農道整備事業船引2期地区工事に伴い、平成17～20年度に実施された清武上猪ノ原遺跡第5地区的発掘調査概要報告書です。
- 調査組織は以下のとおりである。

調査主体　　清武町教育委員会
事務局（平成20年度）

教　　育　　長	神　川　孝　志
教　　育　　次　　長	兒　玉　秀　樹
生　涯　学　習　課　長	日　高　貞　幸
生涯学習課文化振興係長	伊　東　但
生涯学習課文化振興係主任	井　田　篤
調査員	
生涯学習課文化振興係主任	秋　成　雅　博
生涯学習課文化振興係嘱託	今　村　結　記

- 現場における測量・遺構実測作業は秋成・今村・若杉知和（平成17年度嘱託）・平山景将（平成18年度嘱託）
が行い、一部を街ジバンゲサーベイ・株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 遺物の整理及び報告書作成業務については秋成・今村。

が清武町埋蔵文化財センターで行った。

- 本書で使用した写真について、現地での遺構等の撮影は秋成・今村が行い、空中写真については株式会社埋蔵文化財センターで行った。
- 本書で使用した土層及び土器の色調は『新版 標準土色帖（1997年後期版）』の土色に準拠した。
- 本書に使用した方位は磁北(M.N)と座標北(G.N)がある。レベルは海拔絶対高である。
- 本書の執筆と編集は、秋成が担当した。
- 出土遺物やその他の諸記録は、清武町埋蔵文化財センターに保管している。

調査にあたり、以下の方々にご指導・ご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同）
小林達雄、水ノ江和同、橋昌信、佐藤宏之、稻田寿司、木下尚子、柳沢一男、小林謙一、清野孝之、坂井秀弥、岩永哲夫、
菅付和樹、谷口武範、吉本正典、東憲章、日高広人、松本茂、藤木聰、今塙屋毅行、柳田裕三、福田聰、岸田裕一、
日高優子、重留康博、長津宗重、永友良典、赤崎広志、島田正浩、金丸武司、福岡洋道、藤木晶子、石村友規、
畠光博、山下大輔、栗山葉子、加賀淳一、近沢恒典、矢部喜多夫、東和幸、下東嘉也、岡本武憲、新東見一、宮田栄二、
八木澤一郎、前追亮一、黒川忠広、寺原徹、堂込秀人、宮尾亨、寒川知枝、下山覚（故人）、鎌田昭昭、佐藤雅一、
東徹志、岩永勇亮、岩谷史記、岩崎厚志、吉留秀敏、村上昇、遠部慎、杉原敏之、芝康次郎、藤山龍造、杉山真一、
雨宮瑞生、甲斐康大、藤井大祐、中村友昭、綿貫俊一、佐野英司、佐野良文、若月省吾、萩谷千明、深野信之、
鹿又良隆、川道寛、辻田直人、森先一貴、前田潤一郎、今田秀樹、堀田孝博

目 次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 立地と環境	
第3節 調査の概要と基本層序	
第4節 調査区域の現状保存について	
第2章 縄文時代早期の調査	5
■ 集石遺構	
■ 炉穴	
■ 陥し穴状遺構	
■ 出土遺物	
第3章 縄文時代草創期の調査	9
■ 縄文時代草創期の遺構の検出状況と集落跡の概要	
■ 竪穴住居跡	
■ 集石遺構	
■ 土坑	
■ 炉状遺構	
■ 出土遺物	
第4章 後期旧石器時代の調査	22
■ 磚群	
■ 出土遺物	
第5章 おわりに	24

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2	第9図 SI-85 実測図	16
第2図 遺跡周辺地形図	3	第10図 SC-329及びSC-329	
第3図 基本土層図	4	出土遺物実測図	17
第4図 繩文時代早期主要遺構配置図	6	第11図 繩文時代草創期遺物包含層出土土器・ 土製品実測図	19
第5図 繩文時代草創期遺構配置図	10	第12図 繩文時代草創期遺物包含層出土石器実 測図	20
第6図 繩文時代草創期竪穴住居跡実測図①	11	第13図 SR-120 実測図	23
.....		第14図 旧石器時代遺物包含層出土石器実測図	
第7図 繩文時代草創期竪穴住居跡実測図②	12	23
.....			
第8図 繩文時代草創期竪穴住居跡実測図③	13		

図版目次

図版1 土層断面	4	図版16 14号住居跡出土遺物	15
図版2 繩文時代早期集石遺構群 (調査区北側)	5	図版17 SI-85 (集石遺構)	16
図版3 SI-277 (直径4mを超える集石遺構)	7	図版18 SI-56 (集石遺構)	16
.....		図版19 SC-329 (土抗)	17
図版4 SC-97 (炉穴)	7	図版20 SC-329 出土遺物	17
図版5 SC-216 (陥し穴状遺構)	7	図版21 SC-313 (土抗) 遺物出土状況	17
図版6 繩文時代早期遺物包含層出土遺物	8	図版22 SC-313出土遺物①	17
図版7 2号住居跡検出状況	13	図版23 SC-313出土遺物②	17
図版8 2号住居跡調査風景	13	図版24 SC-313出土遺物③	17
図版9 2号住居跡	13	図版25 SC-338 (炉状遺構)	18
図版10 2号住居跡石組炉	13	図版26 ミニチュア土器	18
図版11 4号住居跡	14	図版27 土製品	18
図版12 6号住居跡	14	図版28 繩文時代草創期遺物包含層出土土器	
図版13 3号住居跡土器出土状況	14	21
図版14 14号住居跡	14	図版29 調査区南側旧石器時代遺物出土状況	
図版15 14号住居跡土器出土状況	14	22
.....		図版30 SR-120 (礫群)	23
		図版31 旧石器時代遺物包含層出土石器	
		24

表紙写真 繩文時代草創期竪穴住居跡群スナップ写真

裏表紙写真 巨大集石遺構(SI-277)スナップ写真

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

平成17年度より県営農免農道整備事業船引2期地区工事に伴い、事業区の一部に清武上猪ノ原遺跡の一部が含まれることが明らかになった。遺跡の取り扱いについて、宮崎県中部農林振興局と慎重に協議したところ開発区域について宮崎県中部農林振興局の委託を受け、清武町教育委員会が発掘調査を実施するということになった。調査期間は平成17年7月26日から平成20年5月30日まで、調査面積は約3700m²である。

第2節 立地と環境

清武町は宮崎平野部の南西部に位置する。本遺跡は町の北西部の船引地区に所在し、町内を北西から東へ流れる清武川左岸のシラス台地上に立地する。本遺跡の標高は63～62mで遺跡が立地する台地の斜面の中腹には湧水地点なども確認されている。

本遺跡の立地する台地上では縄文時代早期の資料を中心に貴重な発見が続いている白ヶ野遺跡、滑川遺跡、山田遺跡、坂元遺跡、下猪ノ原遺跡など約20遺跡が所在する（第1図）。

第3節 調査の概要と基本層序（第3図）

清武上猪ノ原遺跡は平成12年度から平成16年度の間に県営農地保全整備事業に伴い発掘調査が行われており、その調査区については第1地区から第4地区までが設定されている。

県営農免農道整備事業によって調査が行われる区域については清武上猪ノ原遺跡第5地区として調査区を設定した。第5地区は第4地区と隙間なく隣接する状況である（第2図）。

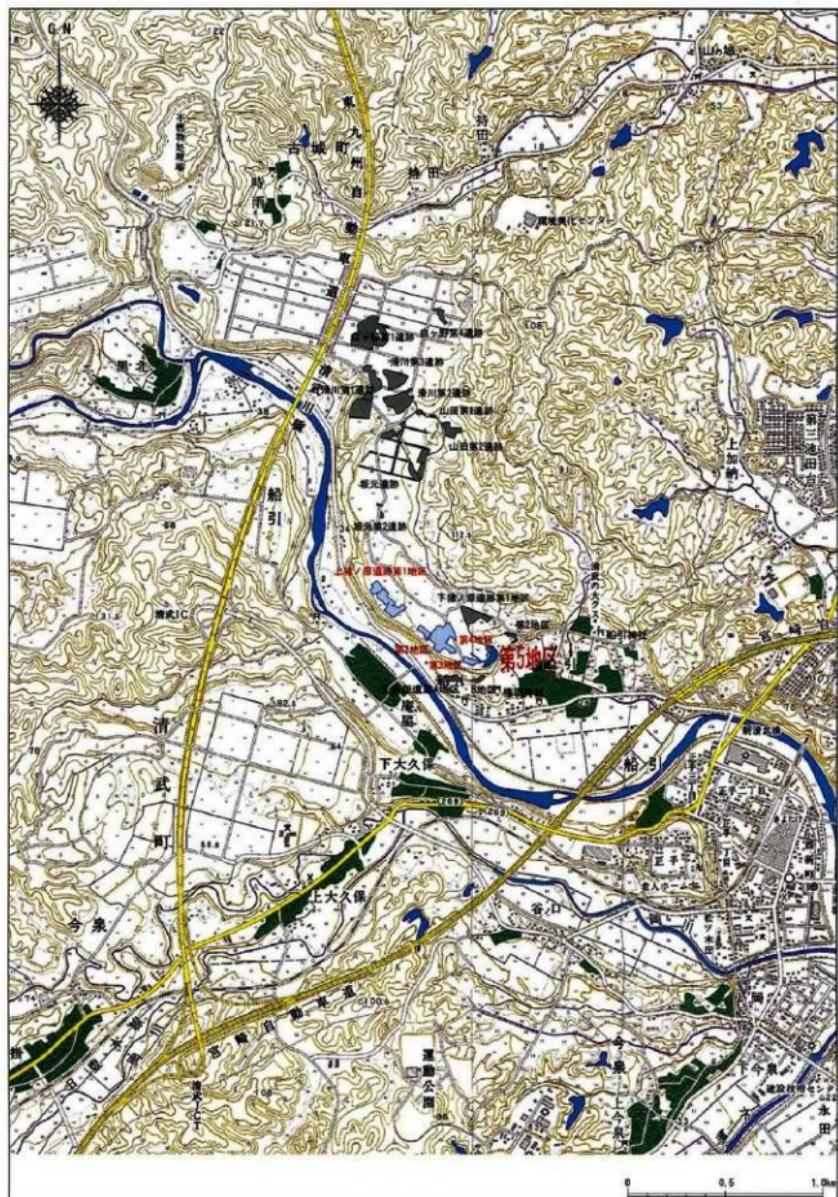
平成17年度にアカホヤ火山灰層上面の調査を終了しており、その概要是報告済みである。（清武町埋蔵文化財調査報告書第19集「上猪ノ原遺跡第5地区」を参照）。本書ではその後おこなわれた縄文時代早期から旧石器時代の調査成果について、その概要を報告する。

縄文早期の調査は4層上面の調査終了後、重機により4層を除去し、早期の遺物包含層である5層を露出させ、5～7層までを人力によって丁寧に掘り下げを行い、早期の遺構・遺物を検出し、その記録作業を行った。早期の調査の終盤にかかった7層下部～8層の掘り下げ中に、草創期の竪穴住居跡等が検出されたため、草創期の遺構・遺物の記録作業を行った。

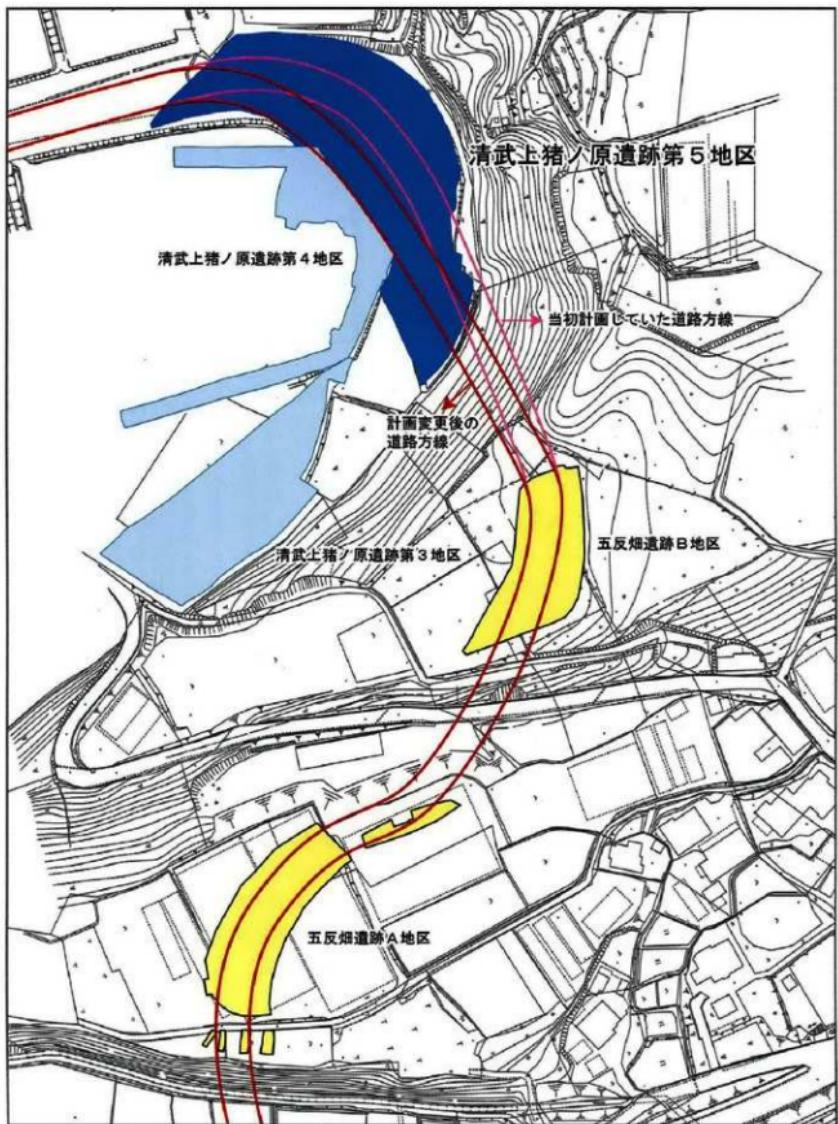
後期旧石器時代の調査は草創期の調査が終了した区域において、旧石器時代の遺物の有無を確認するためのトレンチを設定し、人力によって8層から12層までの掘り下げを行った。遺物が出土したトレンチについては拡張し、さらに掘り下げを進め遺物の出土範囲の把握に努めた。

第4節 調査区域の現状保存について

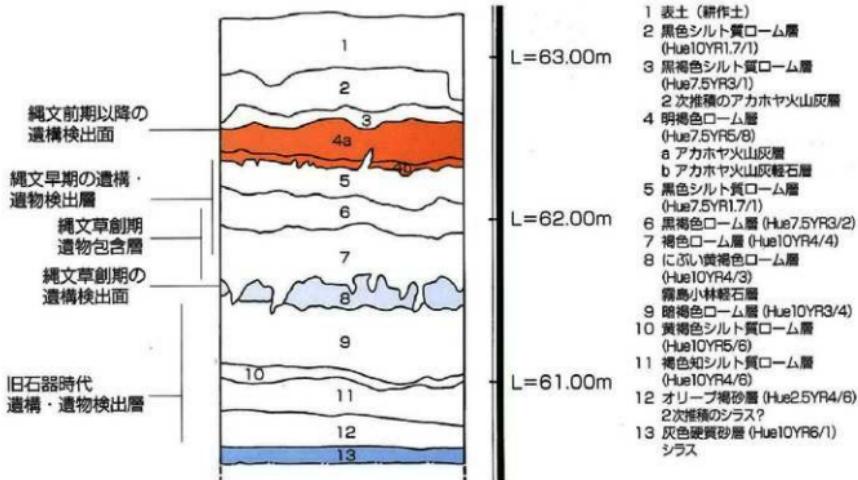
本遺跡において検出された縄文時代草創期の竪穴住居跡は14棟を数え、国内最大級の縄文草創期の集落跡として、全国的にも注目を集めることとなった。平成19年5月20日に現地説明会を行ったところ、県内外から270名以上の参加者があり、本遺跡の関心の高さを認識することとなった。同年8月9日には文化庁文化財部記念物課から文化財調査官の招聘を行い、遺跡の重要性についても高い評価を得ることができた。



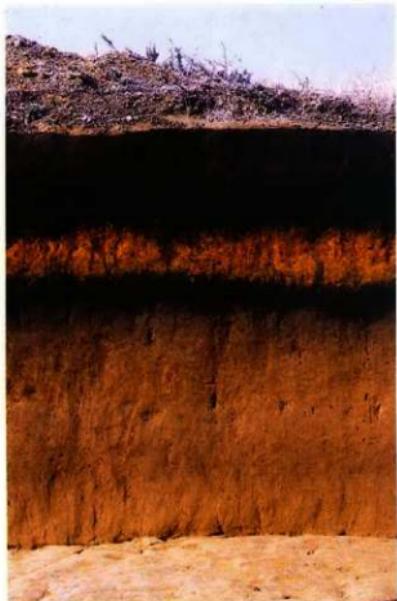
第1図 遺跡位置図 (S = 1/25000)



第2図 遺跡周辺地形図 (S = 1/1500)



第3図 基本土層図 (S = 1/30)



図版1 土層断面

このような評価を受けて、清武町では遺跡を現状で保存すべく、中部農林振興局及び地元の方々と協議を重ね、道路工事の計画変更を要望し、最終的には道路の方線を変更し、遺跡の部分については現状のまま、今後清武町が買い上げる方向でご理解いただいた。この結果、草創期の竪穴住居跡群が検出された範囲の大半（14棟中10棟）を現状で保存できることとなった。

現状保存となった区域は遺構の保護のために、平成20年3月12日から21日の間に、山砂で被った。山砂の厚みは約30～40cmである。

また、平成20年度に開催された「発掘された日本列島2008」において出土遺物の展示がおこなわれた。

第2章 繩文時代早期の調査

縄文時代早期の遺構・遺物の検出された5層～7層を人力により掘り下げところ、焼碟280000点以上・遺物30000点以上が出土した。また遺構については集石遺構145基・炉穴29基・陥し穴状遺構4基・土坑多数を検出している。(第4図)。縄文早期の調査中に草創期の遺構・遺物も一部確認されており、遺構・遺物の帰属時期については現在検討中である。今後の整理作業によって数値等が変更される可能性がある。

■ 集石遺構(図版2・3)

集石遺構は5層下位から7層にかけて検出された。調査区のほぼ全面に広がりが見られる。集石遺構は多量の碟が集中する箇所が見つかることや掘り込みのプランが明確に検出されることによって確認できた。検出された集石遺構は多様であり、碟の数や重量・掘り込みの規模や敷石の有無などから分類することができる。本遺跡で最大の規模を持つ集石遺構(SI-277)の直径は4mを超えており、碟の総数は8131個を数え、総重量506.3kgを計測する(図版3)。

■ 炉穴(図版4)

炉穴は全て6層中位～7層にかけて検出されている。ブリッジの残存しているものは検出されなかった。燃焼部と足場の床面の高さが異なるもの、燃焼部がひとつだけのものや二股に分かれて二つあるもの、斜面の下から上へ登るよう燃焼部がいくつも連なっているものなどいくつかの形態を確認している。



図版2 縄文時代早期集石遺構群(調査区北側)



第4図 縄文時代早期主要遺構配置図 (S = 1/500)



図版3 SI-277 (直径4mを超える集石遺構)

■ 陥し穴状遺構 (図版5)

平面形が橢円形で、床面に逆茂木の痕跡と考えられる小穴が検出された土坑を陥し穴状遺構と判別した。6層中位～7層にかけて検出されている。

検出面における長さは約1.7～2.3mで深さは約0.9～1.3mを計測する。逆茂木の痕跡はその配置状況も数も様々である。

■ 出土遺物 (図版6)

縄文早期の遺物は5～7層上位にかけて出土した。遺物包含層からは早期前葉から末葉までの土器が混在して出土している。遺物包含層の掘削が進むほど古い型式の土器が出土するという傾向が確認された。

石器についても多様な石鏃、磨製石斧、尖頭器、異形石器、敲石、磨石、石皿などが出土している。

今後進めていく整理作業では各型式の土器の分布状況などを把握し、検出された遺構や石器の帰属時期を明らかにすることが課題である。



図版4 SC-97 (炉穴)



図版5 SC-216 (陥し穴状遺構)



図版6 純文時代早期遺物包含層出土遺物

第3章 縄文時代草創期の調査

■ 縄文時代草創期の遺構の検出状況と集落跡の概要（第5図）

縄文早期～草創期の遺物包含層の掘削作業が終わった8層上面において、遺物が部分的にまとまって出土する状況が見られた為、遺構の存在を推定して精査を行ったが、不明瞭なプランしか確認することができなかった。そこでその周囲を数cm全体的に掘りさげたが、状況は変わらなかったので、プランの端にトレンチを設定して遺構の壁を土層断面の観察により確認することとした。観察の結果、立ち上がりのラインが確認できたため、この不明瞭なプランが遺構であるという確信にいたった。草創期の遺構のほとんどがこのような状況から検出されることとなった。

最終的に草創期の遺構は竪穴住居跡14棟、集石遺構2基、炉状遺構2基、土坑19基を検出した。これらは集石遺構1基と土坑1基を除き、本調査区の中央部付近より南西側で北東方向から南北方向に長さ約55m、北西方向から南東方向に幅約20mの範囲に集中していた。

第5地区は本遺跡の東端に位置しており、台地の端部に当たる。ここは冬に強い西風が吹く場所であるが、検出された全ての竪穴住居跡はこの強い西風を避けるように東に緩やかに下る斜面の途中で確認された。住居跡の配置状況は北東方向から南西方向にほぼ一直線に並んでいる。住居跡群のさらに東側はシラス台地特有の急斜面となっており、その中腹には現在も豊富な水量を誇る湧水地点が存在し、地元の人が生活用水として使用している。

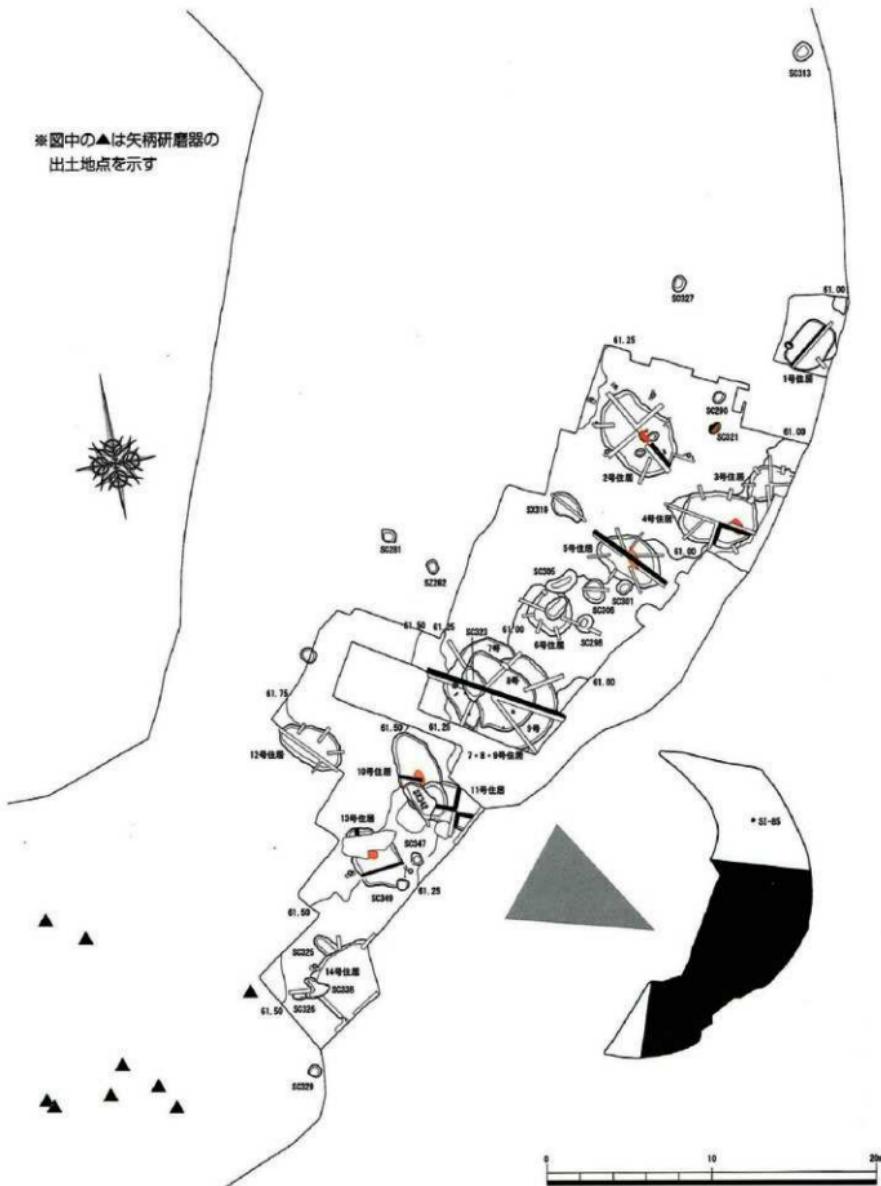
■ 竪穴住居跡（第6～8図 図版7～16）

検出された竪穴住居跡の平面形は不整楕円形・不整円形・不整方形を呈している。床面の中央付近に炉跡が検出された住居跡は5棟あり、そのうちの1棟は石組炉であった（2号住居跡：図版10）。草創期の竪穴住居跡に設置された石組炉の検出は全国で初めてである。また柱穴は3棟の住居跡において検出されており、全て竪穴住居跡の掘り込みの外周に設置されている。

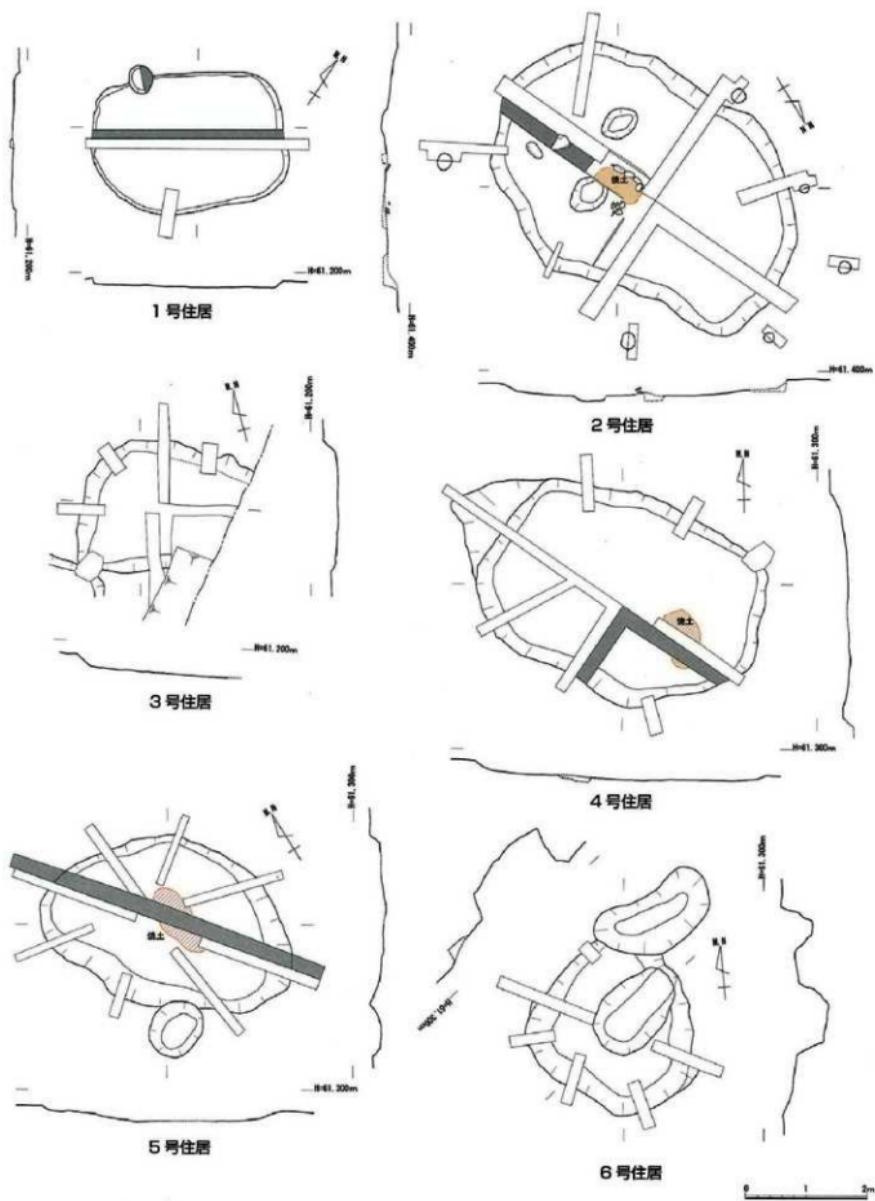
清武上猪ノ原遺跡第5地区縄文時代草創期竪穴住居跡一覧表

住居番号	床面の長軸 (m)	床面の短軸 (m)	平面プラン	炉の有無	柱穴の有無	備考
1号住居	3.0	2.16	不整楕丸方形	無		
2号住居	5.0	3.22	不整楕円形	有（石組み炉）	周囲に6本	
3号住居	2.12 + α	1.8	不整方形	無		
4号住居	4.22	2.64	不整楕円形	有（地床炉）		
5号住居	3.66	2.20	不整楕円形	有（地床炉）		
6号住居	2.16	1.86	不整円形	無		土坑2基と切り合う
7号住居	5.22	4.64	不整円形	無		土坑1基・8・9号住居跡と切り合う
8号住居	4.98	3.62	不整楕円形	無		土坑1基・7・9号住居跡と切り合う
9号住居	5.26 + α	5.20	不整円形	無		7・8号住居跡と切り合う
10号住居	4.18	2.24	不整楕円形	有（地床炉）		土坑2基・11号住居跡と切り合う
11号住居	2.76 + α	2.08	不整方形？	無		土坑2基・10号住居跡と切り合う
12号住居	3.62	1.80	不整楕円形	無		
13号住居	4.24	2.22	不整楕円形	有（地床炉）	周囲に2本	土坑1基と切り合う
14号住居	4.62 + α	3.62	不整円形	無	周囲に1本	土坑1基・炉状遺構1基と切り合う

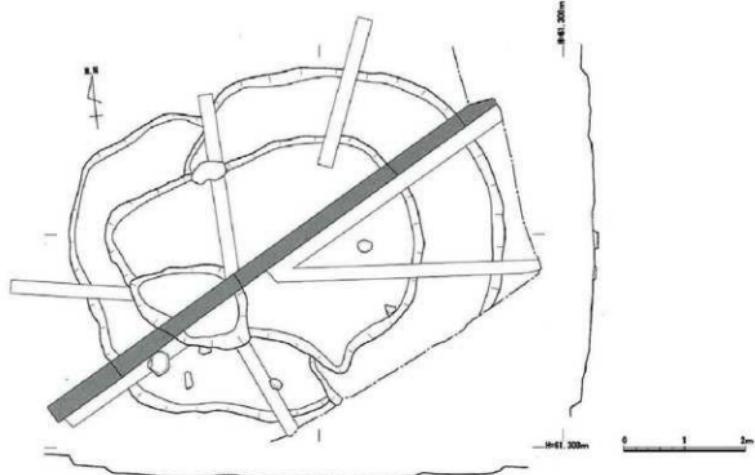
※図中の▲は矢柄研磨器の
出土地点を示す



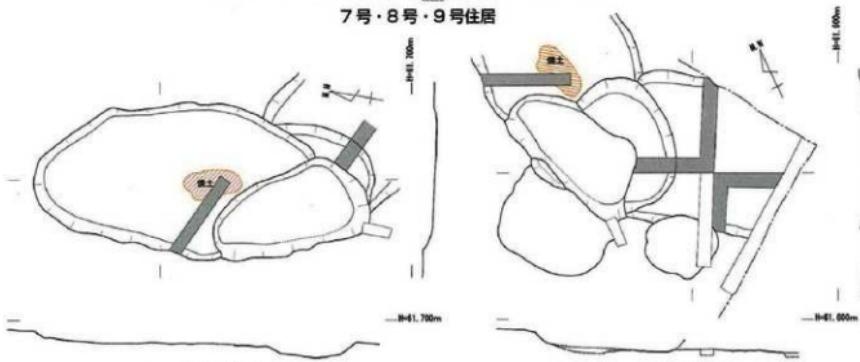
第5図 繩文時代草創期遺構配置図 (S = 1/300)



第6図 繩文時代草創期竪穴住跡実測図① (S = 1/80)

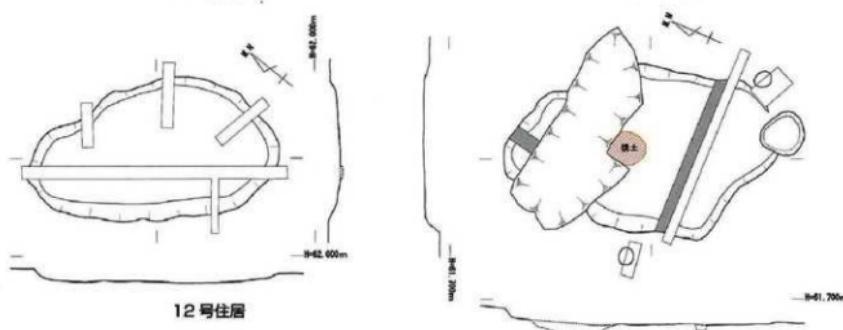


7号・8号・9号住居



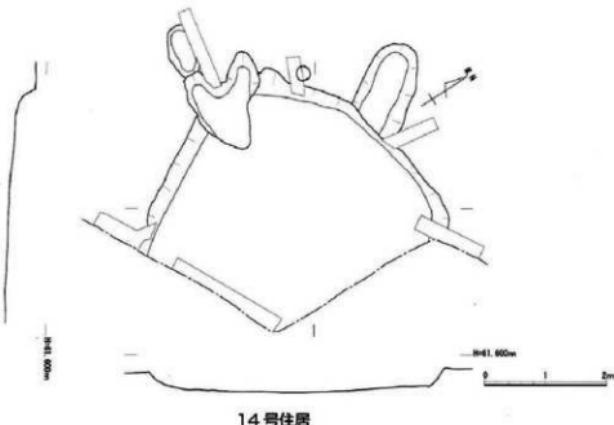
10号住居

11号住居



13号住居

第7図 縄文時代草創期竪穴住跡実測図② (S = 1/80)



14号住居

第8図 縄文時代草創期竪穴住跡実測図③ (S = 1/80)



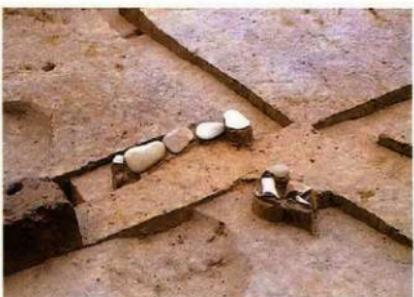
図版7 2号住跡検出状況



図版8 2号住跡調査風景



図版9 2号住跡



図版10 2号住跡石組炉

住居跡の数棟は切り合い関係にあり、すべての住居跡が同時期に存在していたわけではない。住居跡から出土した炭化物を放射性炭素年代測定法で測定したところ、 11720 ± 40 BP～ 11380 ± 60 BPという年代幅のある測定値が得られていることもその裏づけとなる。

さらに14棟の住居跡から出土した土器を観察すると、「ハ」の字を横にした爪形文を施す隆帯文土器だけが出土している住居跡と同様の隆帯文土器と貝殻押圧文土器と一緒に出土している住居跡が見られ。各住居跡の遺物の出土様相に違いが見られている。今後の整理作業においては出土遺物から各住居跡の変遷等の検討をおこなわなければならない。

また石鎌や尖頭器などの各種石器も住居跡から出土しており、これらを検討することによって遺物包含層中より早期の遺物と混在して出土した草創期の石器を分類できるだろう。

14号住居跡からは石鎌が多数出土しており、その中でも特に安山岩製の石鎌は注目すべき資料である（図版16の3段目右）。南九州の草創期の石鎌としては珍しく深い抜りを持ち、脚部の先端が剣の先のように尖っていることが特徴である。まだ整理作業中であり、全ての資料を把握できていないが、このタイプの石鎌は全て安山岩系統の石材を使用しているようである。



図版11 4号住居跡



図版12 6号住居跡



図版13 3号住居跡土器出土状況



図版14 14号住居跡



図版15 14号住居跡土器出土状況



图版 16 14号住居跡出土遺物

■ 集石遺構 (第9図 図版17・18)

集石遺構は、縄文早期のものと視覚的には区別できなかった。草創期に該当する資料があると断定した根拠は、集石遺構の掘り込みの中から出土した炭化物を、放射性炭素年代測定法によって測定した結果によるものである。

本調査区からは、草創期と早期の集石遺構を含めて147基の集石遺構が検出された。そのうちの21基について分析を行い、11000年をさかのばる数値が得られた2基の集石遺構を草創期のものと断定することとなった。

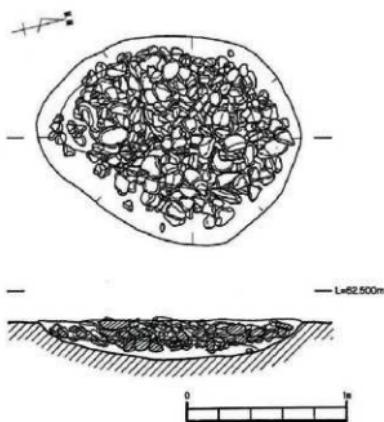
2基の集石遺構は両方とも掘り込みを持つ。SI-56は頁岩の剥片が多く混入していた。SI-85は1.6m × 1.3mの楕円形の掘り込みの中に総数517個：総重量141.9kgの砾が詰まっており、現在のところ草創期の資料としては県内で最大の規模を誇る集石遺構である。

■ 土坑 (第10図 図版19～24)

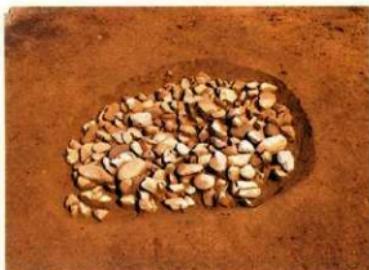
土坑は19基検出されており、いくつかは竪穴住跡と切り合い関係にある。その中でも特に注目されるのはSC-329とSC-313である。

SC-329は14号住居跡の南西部に位置する。袋状竪穴のような形状の土坑で、直径は70cm、深さは80cmを計測する。この遺構からは桑ノ木津留産黒曜石製の打製石鎌と細石刃核が出土している。細石刃核は頁岩の剥片を素材とするもので、素材剥片の打面部分から細石刃を作出している。

SC-313は1号住居跡から北側に15mほど離れたところで検出された。平面形は1.15m × 0.9mの不整楕円形で、深さは0.35mを計測する。床面から20cmほど浮いた状態ではあるが、4～5個体の土器が密集して出土している。そのうちの1個体は、内面の口唇部に刻みがあるもので、他の資料は全て薄手の無文土器である。



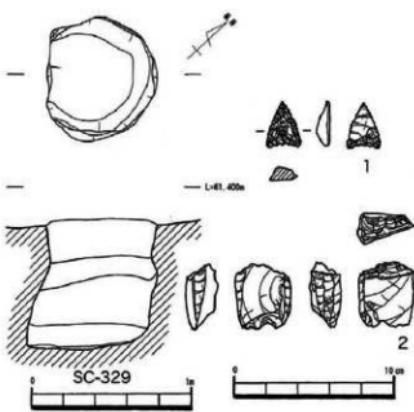
第9図 SI-85 実測図 (S = 1/30)



図版17 SI-85 (集石遺構)



図版18 SI-56 (集石遺構)



第10図 SC-329 及び SC-329 出土遺物実測図
(S = 1/30・2/3)



図版 19 SC-329 (土坑)



図版 20 SC-329 出土遺物



図版 21 SC-313 (土坑) 遺物出土状況



図版 22 SC-313 出土遺物①



図版 23 SC-313 出土遺物②



図版 24 SC-313 出土遺物③

■ 炉状遺構（図版 25）

床面から焼土が検出された土坑を炉状遺構としており、2基検出されている。うち1基は楕円形プランの素掘りの土坑で床面から焼土が検出された。

もう1基（SC-338）は14号住居跡と切り合った関係にあり、二股に分かれている。二股に分かれた一方は床面の一部、もう一方は床面のほぼ全面から焼土が検出された。この遺構は炉穴としての機能が推測されるが、焼土が床面のほぼ全面から検出されるという状況が早期の炉穴とは異なっており、類例を探している。



図版 25 SC-338（炉状遺構）

■ 出土遺物（第 11・12 図 図版 26～28）

縄文草創期の遺物は6層から7層にかけて、前述のとおり早期の遺物と混在して出土している。土器は隆帯文土器が主体であり、貝殻押圧文土器や隆線文土器も出土している。石器は石鎌・尖頭器・石錐・石斧・敲石・磨石・石皿など各種類が出土している。今後は早期の石器との分類作業が課題である。またミニチュア土器、土製有孔円盤・不明土製品も出土している。

九州で初めての事例となった矢柄研磨器は8個体出土している。その全てが堅穴住居跡群の南西側で発見され、その周囲からは槍先形尖頭器や石鎌、その未製品、剥片、碎片などが多量に出土している。遺物の出土状況を総合的に考えると、堅穴住居跡群の南西側が槍や弓矢等の道具の製作場所であったと考えることができる。

※これまで清武上猪ノ原遺跡第5地区の縄文草創期の調査成果については何度か発表の場を頂いている。その際に使用した図面や写真を一通り本書にまとめた。

また、以下の文献等で本遺跡の紹介をおこなっている。

清武町教育委員会 2006 「上猪ノ原遺跡第5地区」清武町埋蔵文化財調査報告書

第 19 集 清武町教育委員会

今村結記・藤木聰 2007 「宮崎県の動向」「九州旧石器」第

11 号 九州旧石器文化研究会

秋成雅博 2008 「宮崎県清武町上猪ノ原遺跡第5地区の調

査」『考古学研究』第五四卷第四号 考古学研究会

文化庁編 2008 「発掘された日本列島 2008」朝日新聞社

秋成雅博 2008 「南九州の縄文時代草創期の様相（宮崎県の

縄文時代草創期概観）」「九州旧石器」第 12 号 九州旧石器文化研究会

秋成雅博 2008 「国内最大級の縄文時代草創期集落跡 - 清武上猪ノ原遺跡の調査 -」『月刊文化財』平成 20 年 11 月号

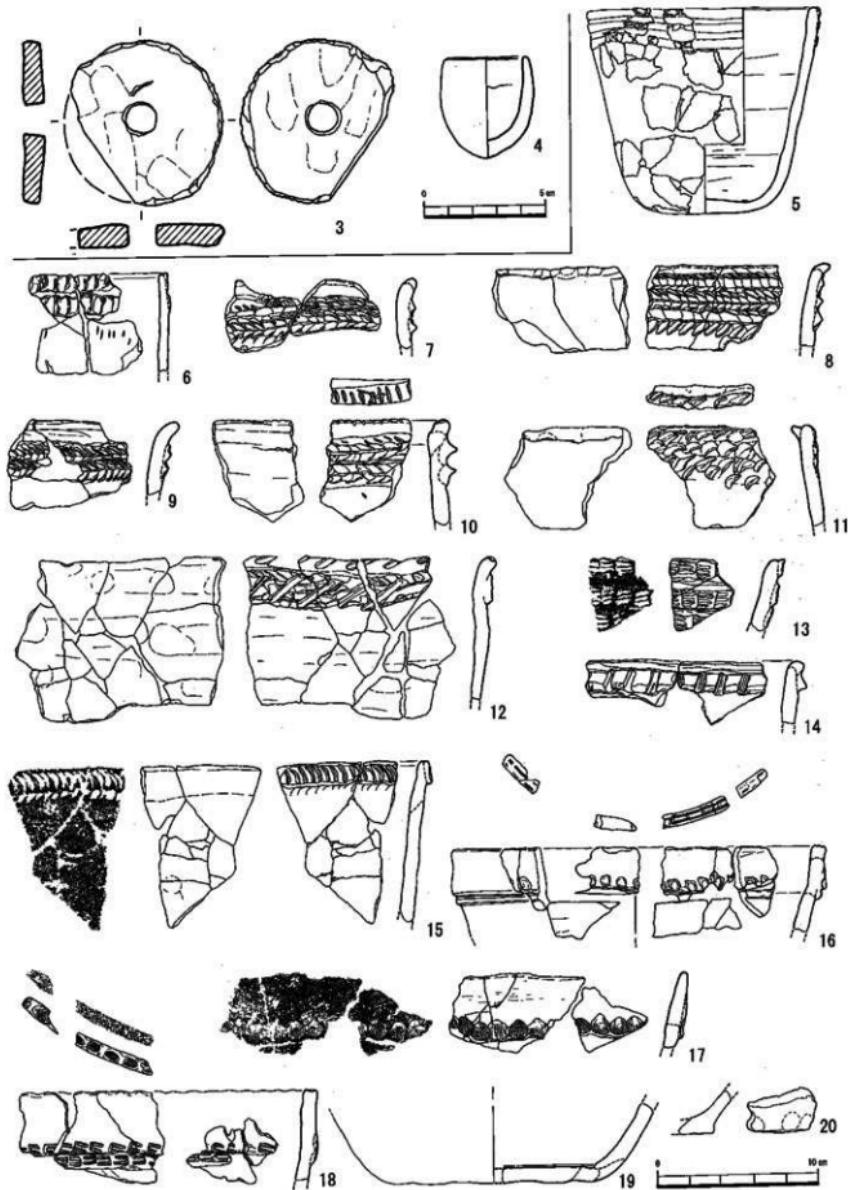
第一法規株式会社



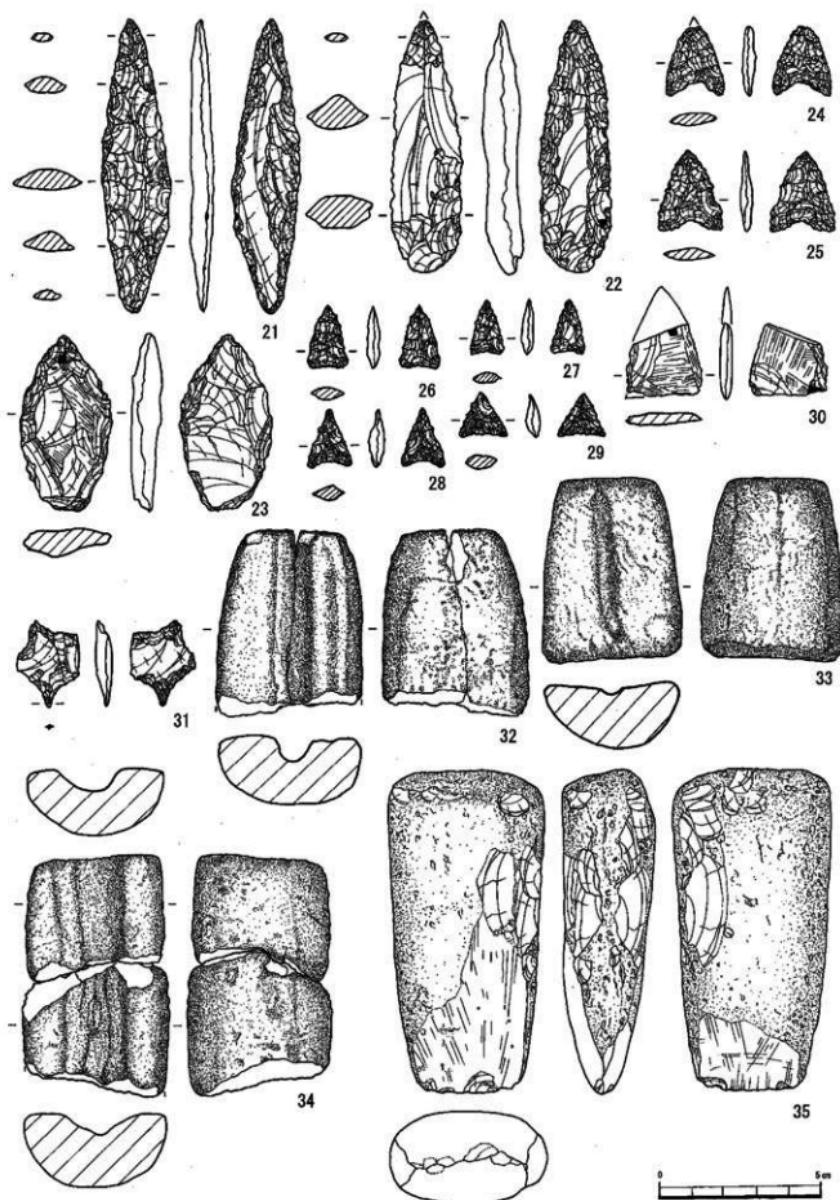
図版 26 ミニチュア土器



図版 27 土製品



第 11 図 繩文時代草創期遺物包含層出土土器・土製品実測図 ($S = 1/3 \cdot 1/2$)



第12図 縄文時代草創期遺物包含層出土石器実測図 (S = 2/3)



圖版 28 紹文時代草創期遺物包含層出土土器

第4章 後期旧石器時代の調査

前述のとおり後期旧石器時代の調査は、縄文時代の調査が終了した範囲にトレンチを設定して掘り下げていくという方法でおこなった。設定したトレンチから遺物が出土した場合は、そのトレンチを拡張して、遺物の広がりを完全に把握するという手順だったため、広く平面的に遺物包含層の掘り下げはおこなえなかった。

トレンチを掘り下げた結果、9～12層において後期旧石器時代の遺物が出土した。調査区の南側の区域ではこの9～12層の各層が厚く堆積している部分があり、9～10層にかけて細身の縦長剥片を素材とするナイフ形石器を主体とする石器群（第Ⅰ石器文化層）が検出された。また11～12層にかけては狸谷型ナイフ形石器を主体とする石器群（第Ⅱ石器文化層）が検出された。各々の石器群に伴うように大振りの礫や焼礫も出土しており、本調査区の南側において、2枚の後期旧石器時代の文化層が確認された（図版29）。

一方、前述した区域以外の範囲（調査区の北側～中央部）では、後期旧石器時代の遺物包含層の堆積状況が悪い部分があった。こちらでは10～12層にかけて、前述の第Ⅱ石器文化層と同じ狸谷型ナイフ形石器を主体とする石器群が検出された。このことから、第Ⅱ石器文化層は調査区のほぼ全面に広がっており、第Ⅰ石器文化層については、調査区の南側にしか広がっていないということが把握できた。

また、本調査区においては細石刃文化期の遺物も出土している。しかし、その全ての資料が縄文時代早期から草創期の遺物包含層の調査中に発見されており、明確に細石刃文化期の文化層を把握することはできなかった。

■ 磁群（第13図 図版30）

磁や焼磁の密集が特に強い部分を磁群として判別し、個別に記録作業をおこなった。

第Ⅱ石器文化層の調査において磁群は22基検出された。掘り込みを有するようなものは検出されていない。磁の数によつて規模は様々である。

また炭化物についても磁の間に多く混入するものやあまり見られないものなど様々な状況であった。

第Ⅰ石器文化層では第Ⅱ石器文化層ほど磁は出土せず、磁群は1基のみ検出されている。



図版29 調査区南側旧石器時代遺物出土状況

■ 出土遺物 (第 14 図 図版 31)

前述のとおり、細石刃・細石刃核 (36・37) は縄文早期～草創期の遺物包含層中から出土しており、黒曜石製のものと頁岩製のものが目立っている。

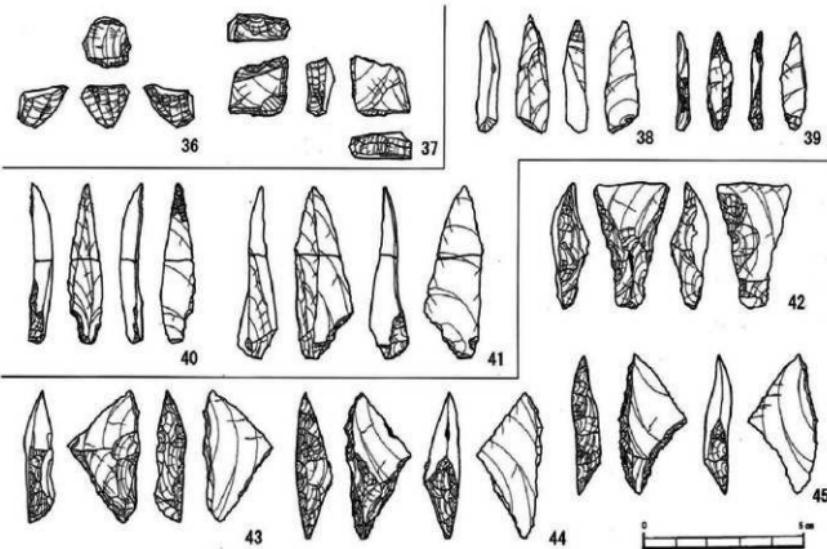
第 I 石器文化層のナイフ形石器は細身の縱長剥片を使用する部分加工・基部加工のもの (38 ~ 41) が主体である。第 II 文化層は狸谷型ナイフ形石器 (43 ~ 45) と台形様石器 (42) が主体となっている。



図版 30 SR-120 (砾群)



第 13 図 SR-120 実測図 (S = 1/30)



第 14 図 旧石器時代遺物包含層出土石器実測図 (S = 2/3)



図版 31 旧石器時代遺物包含層出土石器

第5章 おわりに

調査は初年度から驚きの連続であった。当初から多くの縄文時代早期の集石遺構が検出されることを予想していた。しかし、3700 m²の空間に147基という予想をはるかに上回る数の集石遺構が検出された。それに加えて早期の遺物包含層からは30000点を超える遺物が出土したため、縄文早期の調査は、集石遺構の写真撮影と遺物の取り上げ作業に追われるという日が回るような日々であった。

そんな早期の調査中に矢柄研磨器が出土した。まったく想定外のことであり、1点目が出土したときは信じられず、「九州では矢柄研磨器は出ないから、違うものかもね」と一緒に調査をしていた今村君と話をしていた。ところが次から次へと出土点数が増え、とうとう8個体となった。

そして最後に縄文時代草創期の竪穴住居跡が検出された。全部で14棟、気がつけば国内最大級の草創期の集落跡となっていた。さらに道具の製作空間も把握できるような遺物の出土状況も確認された。

この遺跡の重要さを理解して頂いた関係各局・地元の方々のおかげで、部分的に現状を保存することができることとなった。この恩に報いるように、これからこの遺跡をより多くの人に活用されるものとしていくことが、本町の埋蔵文化財行政の大きな課題である。

いつもご指導いただく諸先輩方や無茶な要求をこなしてくれる整理作業員さん・発掘作業員さん達のおかげで、何とか現場の調査を終えることができました。また、この遺跡に足を運んでくれた大勢の人達から、たくさんの助言と励ましの言葉をいただきました。末筆ながら感謝申し上げます。



巨大な集石遺構 (SI-277) の前で撮影

調査抄録

フリガナ	キヨタケカミイノハルイセキ			
書名	清武上猪ノ原遺跡第5地区			
副書名	県営農免農道整備事業船引2期地区工事にかかる埋蔵文化財調査報告書			
巻次	第2集			
シリーズ名	清武町埋蔵文化財調査報告書			
シリーズ番号	第27集			
編集者名	秋成雅博			
発行機関	清武町教育委員会			
所在地	宮崎県宮崎郡清武町大字船引204番地			
発行年月日	2009年3月			
所在遺跡名	所在地	市町村：遺跡番号	北緯	東経
清武上猪ノ原 遺跡	清武町大字船引 字上猪ノ原	清武町：205	31° 51' 45" (日本測地形)	131° 22' 33" (日本測地形)
調査面積	調査原因	種別	主な時代	調査期間
3,700 m ²	農道整備事業	集落	旧石器 縄文(草創期) 縄文(早期) 縄文(前期) 古墳 古代 中世	主な遺構 縄群 竪穴住居跡 集石遺構 陥し穴 炉穴 掘立柱建物 など
特記事項				
国内最大級の縄文時代草創期の集落跡・九州初の矢柄研磨器の出土 直徑4mを超える縄文時代早期の集石遺構の検出				